

日韓・言語表現と人間関係の対応の比較

柳 父 章*

(1) 切り口上をさける日本語

日本語学者、金田一春彦は『日本語』(岩波新書)でこう述べている。

電話のベルがなって、女の人が出る。

ハイハイ、渡辺でございますけれども……外国人は、よく、この最後の「けれども」はどういう意味だとたずねる。どういう意味もない。切り口上をさけたのである。あるいは次に来ることば、たとえば「何か御用でございますか」というようなことばを略したというべきかもしれない。どっちにしても、はっきり切れるべきところで文章を切ることを避けていることはたしかである。その結果、センテンスの途中でセンテンスを切る。

確かにこれは日本語の大事な特徴で、言葉の特徴であるとともに、ここで言われているように、日本人の人間関係で「切り口上をさけ」る特徴を表している。日本人の人間関係は独立した個人対個人ではなく、人と人とはさまざまな面で互いに依存しあっている。

ところで、私は、この金田一春彦の意見に、結果としては賛成だが、基本的な考え方では反対の部分もある。「けれども」のような中途半端な切れ方が日本語にある、という意見には賛成だが、その説明の仕方には反対である。それは、日本語には「はっきり切れるべきところ」つまり「センテンス」がある、という意見である。日本語にはもともと「はっきり切れるべきところ」「センテンス」という文法の単位はなかった、というのが私の考えである。確かに書き言葉では、「…た」「…である。」のように「はっきり切れる」が、それは近代以後、西洋語の「センテンス」をお手本として、人工的に造られたのである。これに反して話し言葉では、今

日でも、「はっきり切れ」ていないことの方が多。たとえば、この「けれども」で、その他いろいろあるが、とくに「…が」「…ので」「…ても」で切れる言い方など、いわゆる接続助詞がその代表である。

日本語の話し言葉の切れ方には、二つの代表的タイプがあり、一つはこの接続助詞で、もう一つは「…ね」「…よ」「…さ」など、いわゆる終助詞で切れる場合である。私の考えでは、この二つはともに文を「はっきり切」るのではなく、自分の発言を話し相手に向かって投げかけ、話し手と聞き手の発言をつなぐ働きの言葉である。

その、つなぎの働き方について考えてみると、いわゆる終助詞では「美しいですね」というとき、話し手は「美しいです」という意味を、聞き手に向かって投げかけ、同意を求めている。「ね」の一語は、聞き手の同意の発言を引き出すための、つなぎの働きを果たしている。つまり、ここで「ね」は、「終」助詞という、終える働きではなく、むしろつなぎの働きをしているので、終助詞という名前は実は適当ではない、ということになる。

もう一つの、いわゆる接続助詞について考えてみると、たとえば「行きたいんですが」と言うとき、この後に続くはずの発言「つごうが悪くて行けません」のような意味を、話し手は、聞き手に察してもらおうとしている。「が」の一語は、その後に続くはずで言わなかった発言へと、聞き手を誘い込むための、つなぎの働きをしている。そうすると、この「が」は、自分の発言を自分で「接続する」働きの言葉ではないので、接続助詞という名前は実は適当ではない、ということになる。

以上、日本語の話し言葉における、話し手と聞き手との発言との間で、つなぎの働きをする

*本学文学部

二つのタイプについて、ごく簡単に述べた。従来の文法では、それは終助詞と接続助詞に相当する。そしてこの名前は、私の考えでは適当でないと思うのだが、ここで新しい名前を創ると混乱するので、便宜上、従来の名前を借りて、この二つのタイプを、この論文では、「終助詞型」と「接続助詞型」と呼ぶことにしたい。

日本語の話し言葉では、おそらくその発言の半数以上は、この二つに型になっている。こういう発言の仕方は、日本人の人間関係の表現であり、又こういう言葉の使い方が、日本人独特の人間関係を創りだしている。それは一口に言えば、西洋式の個人対個人の人間関係と対照的で、人と人とは常に「間」を重視し、たがいに依存し合う人間関係であると言えよう。日本語の「人間」という言葉は、よくその事情を物語っている。ここで「つなぎ」の働きと私が言ったのは、一つの発言からみれば、発言をまとめ、話し相手に送り渡す働き、人と人との間を取り持つ働きである。発言の終わりにくる言葉は、こうして「まとめ」「つなぐ」最も重要な働きをしている。とくに日本語ではそうだ。

この二つの型のうち、とくに発言の終わりに接続助詞がくるタイプ、すなわち「接続助詞型」は、その特徴をよく表現しており、相手の言いたいことを、暗黙のうちに了解するのを前提に置いた発言で、いかにも日本的である、と言えるかも知れない。

(2) 英語ではどうか

ところで、以上説いてきた発言の二つの型は、日本語だけの特徴なのだろうか。それについてこれから考えようと思うのだが、結論を先に言うと、どうもそうではないらしい。さまざまな言語で、程度の差はあっても、同じような言語表現を窺うことができる。

まず英語であるが、英語は以上述べたように、日本語と対照的な西洋語の一つの代表であり、「センテンス」を基本とする文法を、日本人はここから学んだはずである。ところが、最近、二三十年ほど前から、西洋の言語学で、主として英語について、センテンス文法を批判する

Discourse Analysis (談話分析) とか Text Linguistics (テキスト言語学) という学問が唱えられるようになってきている。簡単にいうと、談話とかテキストというのは、センテンスよりも長い文章の単位で、その構造を考えよう、というわけである。そういう学者の論文の中には、私が以上述べたことと、かなり似た意見を、英語について言っているのも少なくない。それをここで紹介しよう。

言語学雑誌“Journal of Pragmatics”の論文を中心にしてみよう。談話とかテキストにおける、発言と発言を結ぶ構造の捉え方にはいろいろあるが、そのなかで、discourse markers (談話標識) とされる言葉に注目するのがある。それはたとえば well, right, okay, you know, や tag questions (付加疑問), また oh, mm, あるいは that's right, などである。個々の発言の始めや、中途や、終りにつき、私が以上に述べた日本語における二種類の助詞とよく似ている。とくにその多くは、いわゆる終助詞と似ている。自分の発言を相手に投げ掛けて、同意を求めるのである。いわゆる接続助詞と似ているものはないか、と思って探してみると、you know というのがある。とくに発言の終わりに you know がつく場合である。それは、you know that の that 以下が省略されている、ととることもできるのではないか。that 以下の言われなかった発言は、相手に察してもらおうとしている、と考えられよう。

こうしてみると、英語にも「終助詞型」や「接続助詞型」は、確かにある。そうすると、英語を話す西洋人も、個人対個人の人間関係ではなく、人と人の「間」を重視する人間関係を持っているのだろうか。どうもそうらしい。

しかし、ここに違いもある。それは、日本との文化の違いが関係してくるので、英語を話す西洋人の間では、こういう談話標識の言葉は、あまり使わない方がいいとされているらしい。はっきり言って、まともな教養ある人の使うべき言い方ではない、と思われているらしい。社会的に価値の低い言語慣習とみなされているようだ。やや曖昧な言い方をしたが、こういう傾

値判断のともなる問題については、母語としていない人にはなかなか分かり難いことだからである。

とくに、英語には珍しい「接続助詞型」ではないか、と私が言った you know がそうらしく、これが最近、イギリスでもアメリカでも大変流行している。社会的に価値が低い言い方とされているらしいことは、研究者の論文からも窺える。you know は、学歴の低い、労働者階級の言葉使いである、と言う。そしてテレビ・タレント、スポーツ選手や若者たちの流行語になっていると、やや苦が苦がしげに言われている。また「お互いに言い合うことで sense of “we-ness” (我々意識) を高める。それは労働者階級におきまりの言葉遣いである。」とも言われている。個人中心の、センテンス単位の明確な独立した表現を重んずる西洋の文化伝統からみれば、こういう言葉遣いは墮落ともみられるのかも知れない。

これに反して、日本では、「終助詞型」も「接続助詞型」も、決して社会的に価値の低い言葉遣いではない。社長や先生の前で、「いらっしゃいますね」とか、「参加したいんですけども」などと言うのは、ごく当たり前の言葉遣いである。

一般に、文化の違いというのは、事実の違いであるよりも、同じような事実に対する価値判断の違いであることが多いのではないか。たとえば、土居建郎は『甘えの構造』で、「甘え」というのは日本だけではなく、西洋にもある。だが、西洋人はこういう心理を価値が低いと見ていたために、適当な言葉もなく、精神医学のまともな研究対象とされてこなかったのだ、と言っている。

(3) 渡辺吉鎔の批判

言語学者、渡辺吉鎔(길용)は、『朝鮮語のすすめ』(講談社現代新書)で、私が始めに引用した金田一春彦の説を、やはり同じように、そしてもっと詳しく引用して、次のように反論している。

では、これら「いいきらない表現」をめぐ

る論点は、はたしてどのくらいの信ぴょう性を持つものだろうか。文末をにごしたい方をするのは、本当に日本人特有の、日本的文化の所産だろうか。答えは「ノー」である。現代日本語論の主張に反して、「いいきらない表現」は、日本語だけの特色ではない。朝鮮語にも「いいきらない表現」があり、その用法も日本語そっくりであることに注意していただきたい。

……

たとえば、人が訪ねてきたが、ちょうどその人が会いたがっている人が留守であったとする。その時、朝鮮語でも、

^{チ ョム ナ ガ シ コ アン ケ シル テ ヨ}
차근나가시고안계실테요

(今、出かけていらっしゃいませんが)

といって文末をにごす。

また、ちょっと会ってほしいといわれたが、相手の要求に応じられないような時、朝鮮語でも、

^{チ ョム ナル コ ヂ ヨ イ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ}
좀갈곳이있는데요

(ちょっと行くところがありますが)

と「いいきらない表現」を用いてことわる。

この時、もしも、

^{チ ョム ナル コ ヂ ヨ イ ス ヂ ヂ ヂ}
좀갈곳이있읍니다

(ちょっと行くところがあります)

といってしまうと、一方的に自分の意見をはっきりつきつけてしまうような感じになって、相手への配慮が足りないと思われかねない。

……

では、この「いいきらない表現」を有する韓国人は、日本人と同じような表現心理や言語観を持っているのだろうか。すなわち、日本人同様、韓国人もものごとをはっきりいうのを良しとしないのか、そして、ものをいうよりはいわないのを美德とするのだろうか。この問いに対する答えも「ノー」である。

……

韓国人のコミュニケーション・パターンは、西洋型と一脈通ずるところがある。目上の人に対する言語表現は別として、一般の人々に対するもののいい方は、日本人にくらべるとはるかにずばりと遠慮のない言い方を用いる

し、ものごとをはっきりいうのを良しとする。

以上の渡辺吉鎔の意見を要約すると、韓国語にも日本語と同じ「いいきらない表現」、すなわち私の言う「接続助詞型」がある、ということ、そして、それにもかかわらず、韓国人の人間関係は、日本人と違って「ものごとをはっきりいう」ということである。

渡辺のこの意見は、私が述べてきた考えと一見矛盾するようで、重要な問題提起であると思う。そこで、この意見と私の考えとをつき合わせてみよう。問題は二つある。一つは言語表現に関してで、渡辺の言う「는(은)대요」で切れる表現が、私の言う「接続助詞型」と同じかどうか、ということ、そしてこういう表現の社会的な価値はどうみられているのか、ということ。もう一つは、人間関係に関してで、韓国人は日本人と違って「ものごとをはっきりいう」というのは、どこまでそうなのか、ということである。もう一つ、一般に言語表現と人間関係との間には一定の対応関係があるのか、という問題もあるが、これはここでは私の結論、対応関係はある、ということだけを述べておこう。

この二つの問題はともに、韓国の言語表現や人間関係によく通じていない私には非常に困難なのだが、私にとって重要な問題なので、困難を承知のうえで敢えて発言し、この研究会に列席の方々にお教え願いたい、と思うわけである。

(4) 韓国の場合は、日本・西洋の中間か

渡辺の挙げた「いいきらない表現」の二つの例文では、二つとも、終りは「는대요」となっているが、ここで、日本語の接続助詞に対応する韓国語の接続語尾は、「는대」までではないか。渡辺のこの本には、他にも「いいきらない表現」が挙げられているが、すべて接続語尾プラス「요」で終わっている。ではこの「요」は何か。文法書を見ると、任瑚彬(임호빈)、洪環杓(홍환작)、張淑仁(장숙인)共著『韓国語文法』(延世大学校出版部)によると、相对尊敬法の非格式体で、尊待形語尾의가요に対して、下待形語尾가となっている。梅田博之著『スタンダードハングル講座2』(大修館)では、

略体丁寧形語尾어요に対して、普通形語尾は어となっている。そしてこの本の日本語訳では、丁寧形は「るね」、普通形は「る」と訳されていたり、また丁寧形で「です」、普通形「だ」と訳されていたりする。

以上の説明などによると、요は、日本語の終助詞「ね」「よ」などにかなり似ている。そうだとすると、渡辺가좀갈곳이있는데요を、「ちょっと行くところがあるますが」と訳していたのは、「ちょっと行くところがありますね」とでも訳した方がいいということになる。そして私が始めに述べたように、発言が終助詞で終わっているか、接続助詞で終わっているかは大事な違いで、요を語尾にもつ発言は、「接続助詞型」ではなく「終助詞型」ということになり、典型的な「いいきらない表現」ではないということになる。

しかし以上の私の説明は必ずしも十分ではない。第一に、語尾は日本語の終助詞と果たして同じか。どうも日本語の終助詞よりも、発言全体をまとめる働きは弱いのではないか。たとえば梅田の前掲書では、요を語尾とする略体丁寧形は歴史が新しく、おもに女性に使われている、と言っている。そうすると、는(은)대요を語尾とする言い方は、「接続助詞型」と「終助詞型」との中間ぐらいなのかも知れない。

そして第二に、語尾요を使わず、는(은)대のように接続形の語尾のまま終える言い方は、親しい人どうしではよく使われているらしい。韓国で生活していた本学の同僚、蔵田雅彦がそう語っている。また梅田の前掲書で、韓美卿(한미경)は、若者は目上の者に対して어요の語尾で話すが、仲良くなると、甘えて요抜き어의語尾で話す、と言っている。韓国にも、私の言ったのと同じ「接続助詞型」はある、と考えなければならない。

ところで、こういう話し方に対する、韓国内での社会的価値はどうか。蔵田雅彦は、接続語尾のまま切れる言い方は、반말と言って、くだけた話し方、あるいはややぞんざいな話し方とされていると言う。韓美卿の説明によると、仲間うちでの甘えた話し方で、きちんとした場

では使っていけないとされるようだ。こうしてみると、英語における you know ほど価値が低くはないが、どんな場面でも使うことのできる日本語における「接続助詞型」よりは低くみられているらしい。

すなわち、日本語、英語、韓国語のそれぞれに、私の言う「接続助詞型」はあるが、その社会的価値では、日本語がもっとも高く、英語がもっとも低く、韓国語はその中間ということになる。

さて、渡辺吉鎔の提起した第二の問題、韓国人の人間関係はどうか、ということについて考えよう。韓国人はなぜ日本人よりも「はっきりいう」のだろうか。渡辺は同じ書物の中で、日本人の「和」に対する、韓国人の「儒教的要素の強い「道理」という価値観」を指摘している。また李御寧(이어녕)は、『韓国人の心。』(学生社)で、日本人の喧嘩がすぐに手を出すのに対して、韓国人の喧嘩を、言葉を尽くす「君子の争い」と説いている。いずれも「はっきりいう」背景に儒教文化をみているわけである。これは言語表現の面からみると、きちんとした場面での言葉遣いに対応していると考えられる。

ところで、韓国人の人間関係には、これとは対照的な、一見矛盾するようなもう一つの面もあるようだ。それは「はっきりい」わない面である。たとえば渡辺じしん同じ本の中で、愛の言葉をはっきり口にしないと、自作の料理を

客に自慢しないなどの例も挙げている。また崔在錫(최재석)は『韓国人の社会的性格』(伊藤亜人、嶋陸奥彦著、学生社)の中で、むしろ「はっきりい」わない特徴として、上下の身分秩序を緩和させる어리광(甘えること)や, 눈치(気配によって察知する相手の心の機微, あるいはそれを察する能力)を指摘している。李御寧はこの눈치について、強者に虐められた歴史の中で身につけた弱者の知恵と説明している(『韓国人の心』)。また同書で、西洋人が紛争を裁判や討議で解決しようとするのに対して、韓国人が「損益を計算しないでいきなり白紙に還してしまう」폴다「ほぐしの方式」を説いている。以上、韓国人のこういう「はっきりい」わない面をまとめれば、くだけた場面での言葉遣いに対応していると言えそうだ。

ただし、この「はっきりい」わない場合にもう一つ、渡辺が以上の引用の中で、「目上の人に対する言語表現は別として」と言っており、この場合は、きちんとした場面であってしかも「はっきりい」わないので、以上の私のまとめ方に対する例外となっている。

こうして考えると、結論として、韓国人の人間関係は、日本人よりは互いに「はっきりいう」が、西洋人ほどは個人主義的でない、という中間あたりになるのではないか。言語表現と人間関係は、大きく見れば、やはり対応しているのだと思う。

柳父章氏の報告をめぐる討議

柳父章教授は、「日韓・言語表現と人間関係の対応の比較」というテーマで報告され、日本語、英語、韓国語（朝鮮語）の文末語に、人間関係および文化が反映している点を論じられた。

まず、日本語の文末語の特徴として、「……けれども」、「……が」などの接続助詞で終わる文は、人間関係で切り口上を避ける特徴を示している、という金田一春彦氏の所論を紹介された。もうひとつの表現としては、「……ね」、「……よ」などの終助詞で終わる表現がある。しかし、日本語の文末語は金田一氏の言うように「切り口上を避け」てあいまいな表現が使われるのではなく、つなぎの役割を果たし、相互に依存し合う日本的な人間関係のあり方を表しているというのが柳父教授の主張である。

次に、最近の談話分析やテキスト言語学の研究を引用しながら、英語においても“You know”や付加疑問など、文章として言い切らない終わり方があることを指摘される。しかし、英語と日本語の違いは、これらの文末語に対する社会的価値が英語の場合低いということであり、文化の違いは、事実の違いよりは同じ事実に対する社会的評価の違いであることが多いと論じられた。

韓国語に関しては、渡辺吉鎔氏の所論を紹介し、「言い切らない表現」は日本語だけの特徴でなく韓国語にもあるが、韓国人の人間関係は「ものことをはっきり言う」パターンであるという。しかし、柳父教授によれば、問題はそのような表現の社会的評価であり、韓国人の人間関係は日本人よりは「はっきりと言う」が、西洋人ほどは個人主義的ではなく、中間あたりとなり、言語表現と人間関係はこの場合も対応していると結論付けられた。以上の報告に対して、啓明大学校日語・日文学科長の金致洪副教授から、「日本語にあいまいな表現が多いということは、日本語が丁寧な表現に優れていることを

示すのではないか」とのコメントがあり、柳父教授は、「日本語のあいまいな表現そのものが相手の気持を察して言う、礼儀にかなった表現である」と答えられた。また、李御寧氏の言うㄱㅅ(ヌンチ)と日本語のあいまいさとの関係についての質問に対しては、「土居健郎氏の言う甘えがそれに相当するのではないか」と答えられた。

次に本学の小田亮助教授（文化人類学）から、「韓国語では終助詞型の社会的価値が低く、接続詞型の社会的価値が高いということだが、日本語の場合はその逆ではないか」、また「言語表現に対する価値判断と人間関係に対する価値判断が対応するという指摘だが、言語表現に対する価値判断にはすでに人間関係に対する価値判断が反映されているので、それと人間関係に対する価値判断が対応するというのはトートロジーではないか」との、質問およびコメントがなされた。柳父教授からは、最初の点に関しては「日本語の場合、敬語を使うのが一番価値が高いと見られる。韓国語のㄱㅅは、なれなれしい表現で、必ずしも価値は高くない」、第二の点については「小田氏の意見に賛成だが、日本語では文末の助詞を重視するのに英語では重視しないと今まで言われてきたが、最近英語でも重視されはじめた点が重要である」との返答がなされた。また、啓明大学校崔明周助教授からは、「文末表現には地域、階層、性別などが反映されており、韓国語を日本語と英語の中間というのは無理があるのではないか」との意見が出された。

この他、熊谷所長より、불다(ほぐす)を白紙に戻す、とする李御寧氏の説明に対して、その妥当性を問う質問があり、啓明大学校の金善政助教授および本学の金学鉉教授から、「白紙に戻すというよりは、長期的な利益を重視することであり、またシャーマニズム的な意味合い

で緊張を解く意味がある」などの解説がなされた。

言語表現と人間関係が対応するという柳父教授の指摘は、言語と文化をつなぐ重要な論点を含んでおり、啓明大学校の先生方を交えて日本語、英語、韓国語の比較がなされた事は大変有

意義であった。ただ、韓国語が英語と日本語の中間ではないか、という柳父教授の問題提起は、韓国語の文末表現の社会的評価が十分確定できなかったため、さらに論証を必要とするのではないかと思われた。

(蔵田雅彦*)

*本学文学部